

『周池会談』への偲び

韓 東 育

本日は、宮本雄二大使、そして姜尚中先生のお二方からお話を伺い、大変感動いたしました。なぜなら、お二人のご講演はきわめて温かく、歴史に「温度」を与えながら語ってくださったからです。同時に、理性的かつ歴史的な視点から東アジアを論じてくださり、学者の姜尚中先生にはもちろんのこと、外交官の方もここまで深く東アジアの将来を考えておられることに、大きな学びを得ました。心より感謝申し上げます。

私は幾つかの部分に分けて話したいと思っております。

第一に、周恩来中華人民共和国初代国務院総理と、創価大学の創立者であり創価学会名誉会長である池田大作先生との会見について振り返ります。2024年は、この会見からちょうど50周年にあたります。その意義を写真なども交えながら偲びつつ、いくつかの問題提起を行い、皆さまと共に考えたいと思います。

■ 周恩来総理と池田大作先生との会見

ここからは中国語で話しますが、スライドは日本語でご用意しています。

鈴木将史創価大学学長からも言及がありましたとおり、昨年11月15日、池田先生がご逝去され、一周忌を迎えました。池田先生のご体調については以前から心配しておりました。中国でもこの会談50周年にあたり、研究機関による特別研究が行われており、大変意義深い動きだと感じています。

ここに池田先生に寄せられた言葉を紹介します。フィリピン・リサール協会の元会長口ヘリオ・キアンバオ氏は次のように語っています。

「世界平和、人類の融和、国際化、環境保護主義など、池田博士の提言は、世界中の何百万もの人々に大きな影響を与えてきました。また、世界のリーダーとして、愛や希望、正義などの価値を広めてられました。その人生は多くの人々の生命と心にいつまでも残り続けることでしょう。」

また、公明党代表（当時）の山口那津男氏も次のように述べています。

Han Dongyu（東北師範大学元副学長）

本稿は周恩来・池田大作会見50周年記念シンポジウム（2024年11月30日～12月1日、於・創価大学）の全体会1「対話による東アジアの平和構築」における基調講演に加筆修正を施したものである。

「今年（2023年）は、日中友好条約締結45周年の節目の年です。今回は、訪中直前に日中首脳会談が行われ、公明党創立者である池田大作先生の逝去が重なる中での訪中となりました。お会いした方々から池田先生への深い哀悼の意が示され、池田大作先生が築かれた日中友好の『金の橋』の重みを改めて実感しました。池田先生は1968年9月、日中国交正常化を提言され、72年の国交正常化の道を開きました。74年12月には当時の周恩来総理と会見。この時の両氏の思いが結実したのが日中平和条約です。」

山口氏の言葉の通り、1974年12月、池田先生は周恩来総理と会見しました。多くの著名な指導者たちが池田先生を追悼されていること自体、この会談が歴史的な転換点であったことを物語っています。

これが当時の写真です。周恩来総理は当時、重い病を抱えており、外国からの賓客と会うことはほとんどしていませんでした。しかし、池田先生の訪中に際しては、特別に会見が許されました。当初は「5分だけ」と言われていたものが、結果として30分間の会談となったと伝えられています。周総理は、学生時代の日本留学を懐かしみ、「日本を離れたのは桜が満開の季節でした」と語りました。これに対し池田先生は、「ぜひ桜の季節に、もう一度日本へお越しください」と応じられました。しかし周総理は、自身の病状を悟っていたのか、「それは難しいでしょう」と答えたといえます。それほど重い病状だったのです。

■ 日中国交正常化と民間外交の歴史的意義

池田先生は新中国から6名の国費留学生を創価大学に招きました。後の程永華元駐日大使も、そのうちの1人です。池田先生は、周恩来総理、またその留学生たちのために桜の木を植えることを提案され、「周桜」と名付けました。のちに周恩来夫人の鄧穎超さんが日本を訪れ、池田先生は「周桜」と別に、「周恩来桜」「鄧穎超桜」を植樹され、合わせて「周夫婦桜」と名付けられました。今年4月、私が創価大学を訪れた際も、この桜を拝見いたしました。非常に美しく、深い意義を感じました。

池田先生は、周総理との会談や留学生との交流、「周桜」の植樹に至るまで、陰で多くの努力を積み重ねてこられました。戦争によって多くの人々が命を落とし、恨みを抱くことは自然のことです。それでもなお、日本と中国の間に「友好は必要なのか」という問いに、池田先生は明確に「必要である」と示されました。

数千年に及ぶ交流の歴史の中で、中日両国間には戦争で一時期に不幸な歴史がありました。冷戦下の国際情勢の中で、日本はアメリカの動向を見極めてから中国との関係を考えるのが一般的でした。その中で先見性をもって行動したのが池田先生でした。

中日関係は日米関係にも影響を及ぼします。もしアメリカ大統領の訪中がなければ、中日関係改善は、さらに遅れていたかもしれません。池田先生が東京で日中国交正常化提言を発表されましたが、当時としてはきわめて明快かつ大胆な行動でした。

池田先生は中国訪問の際、至るところに防空壕があることに気づき、「ソ連の核攻撃に備える

ため」と説明を受けました。帰国後、池田先生はソ連を訪問し、クレムリンでコスイギン首相と会見します。そこで、「中国を攻撃するつもりはありますか」と単刀直入に問いかけたところ、コスイギン首相は「そのつもりはない。中国にそう伝えてほしい」と答えました。池田先生はこれを「朗報」と受け止め、同年12月には再び中国を訪れ、その内容を周総理に伝えました。このように、池田先生は水面下においても不断の努力を重ね、中日国交正常化に大きく貢献されたのです。

周恩来総理から鄧小平氏、胡錦濤氏、そして習近平主席に至るまで、公明党との関係は継続してきました。公明党は当時、野党でありながら重要な役割を果たしたと、日本側からも評価されています。また中国、共産党政権も公明党を高く評価しています。習主席と山口公明党元代表との会見も、これまで複数回行われています。程永華元駐日大使も、公明党との長年の友好を象徴する人物の一人です。

中日関係が厳しさを増した際には、「公明党がパイプの役割を果たした」と中国の元留学生たちもよく語ります。政党間関係が良好に保たれてきたことは、きわめて重要な意味をもっています。

■ 池田大作先生の功績

続いて、池田先生の多岐にわたる功績について触れたいと思います。最終的には池田先生の「哲学」に行き着くものだと考えています。宗教は、池田先生が物事を考える際の一つの枠組みでした。宗教的着眼点は、きわめて大事です。池田先生は21世紀を迎える以前から、東アジアで大きな変化が起こる可能性を予見していました。東アジアに新たな軸が生まれるかどうかは、予見力と備え次第であると考えていたのです。

池田先生は、アーノルド・トインビー博士と『21世紀への展望』について語り合い、ヘンリー・キッシンジャー氏とも対談を行いました。これらの著作は中国語にも翻訳されています。池田先生の発言は仏教的なイメージが強いと思われがちですが、実際には非常に幅広い哲学思想を示しています。著書『「平和」と「人生」と「哲学」を語る』からは、宇宙観に基づく壮大な思想が伝わってきます。

宇宙飛行士が宇宙から地球を眺めたとき、国境は見えません。国境とは、人間が引いた線に過ぎず、宇宙から見れば、私たちは地球共同体の一員である——池田先生はキッシンジャー氏との対話の中で、このように語っています。

また対談集『「平和」と「人生」と「哲学」を語る』には、大乘仏教の重要な思想も説かれています。大乘仏教には「衆生済度」という理念があります。さらに、池田先生は、哲学と科学技術の関係についても指摘されています。科学技術を過度に信奉すると、死という概念を忘れがちになります。科学技術の先に死が存在しない、すなわち欲望が無限につながっていく、無限連鎖が生まれる危険性があると指摘されたのです。

池田先生は、科学技術の限界を認識し、そして人文学的視点を非常に重視されました。私は、

この点こそが非常に重要であると考えています。

さらに、トインビー博士との対話の中で、次のようなやりとりがありました。

「もし生まれ変われるならば、どこの国に生まれたいですか」

博士は笑いながら「紀元1世紀、仏教が伝来したばかりの新疆に生まれたい」と答えています。西暦4～5世紀、クチャという地に、鳩摩羅什という人物がおり、300以上の仏典を翻訳しました。維摩経、法華経、阿弥陀経、般若心経などがそれにあたります。この点から見ても、博士が仏教の発祥地に深い関心を抱いていたことがうかがえます。

池田先生の哲学は、宇宙の大生命観にも根ざしています。そのスケールは非常に大きく、私たちのような普通の人間には容易に理解しがたい部分もあるかもしれません。

また池田先生は、善悪を単純に断じるのではなく、人間の本性は自然に近いものであると説いています。この姿勢は、荀子や孟子の思想にも通じます。このように池田哲学には、一本の太い芯が通っています。

仏教の概念に「月印万川（がっちんまんせん）」という言葉があります。英訳は難しいかもしれませんが（“The Moon’s Reflection in Ten Thousand Rivers”）、月があり、世界中の川がそれを映し出す——これは池田哲学を象徴する概念だと言えるでしょう。

現在、世界各国には池田先生の思想を研究し、実践する研究機関や教育機関が数多く存在します。これは私が昨年撮影した写真です。

■ 中国における池田思想研究と教育交流

次に、第二に重要な点を皆さまと共有したいと思います。

私の母校である東北師範大学は、2000年3月10日、池田先生に名誉博士号を授与しました。「名誉博士号」は極めて高い栄誉であり、国内でも唯一の授与例でした。当時、史寧中学長らが式典に参加し、私は自ら記事にまとめ、新聞にも掲載されました。スライドに示したのは、聖教新聞の報道です。創価大学の先生方や学生の皆さんからも多くの資料が寄せられ、現在も大切に保管しています。

私は帰国後、東北師範大学において池田思想を広めるための活動に取り組みました。創価大学の高橋強教授と相談し、大学内に新たな哲学研究所を設立しました。宗教よりも、哲学の方が理解されやすいと考えた結果、池田哲学研究所を設立したのです。これは研究所設立当時の写真です。

2020年のコロナ禍には、「平和と文明：池田大作の哲学精神と東アジア思想文化国際シンポジウム」をオンラインで開催し、周総理と池田先生の会談が中日交流に与えた影響を改めて確認しました。

■ 政府間との協力関係

このようにして交流は深まりました。スライド写真は公明党の議員秘書・中条氏で、創価学会と中国の間を橋渡しし、木の橋を鉄の橋へ、そして金の橋へと発展させた重要な人物です。

日本政府も ODA や留学生支援を含め、多方面で協力してくださいました。人文的な交流もあります。その中で最大の成果が、中国から日本に留学に行く人たちのための「予備学校」の設立です。これは文部科学省と中国教育部が、海外で合意し、実現した取り組みでした。設立から45年間で4,000人以上の中国人留学生が日本の主要大学へ進学しています。これは特筆すべき成果です。中国の発展の速度が加速する中、留学先としては、3分の1は日本を選ぶ状況でした。私自身もこの予備学校に関わる業務に携わっていました。この場をお借りして、日本の先生方、文部科学省、各大学と研究施設および長年にわたり中国人留学生を支えてくださった日本の市民の皆様に、改めて感謝申し上げます。

こちらの写真は、山口那津男氏が本学を訪問された際のもので、予備学校40周年の記念行事の折で、秋野公造議員をはじめ、多くの方々が来訪されました。山口氏は、ご自身のお父様についての本を手に、私と記念写真を撮ってくださいました。私は一教員に過ぎませんので、学長が少し不満そうでしたが（笑）、大変光栄でした。

さらに日本の文部科学副大臣であった浮島智子氏、多くの議員、中国外交部関係者、そして程永華ご夫妻も参加され、まさに壮観な場となりました。日本の与党代表が来校されたという点で、これは空前とも言える出来事でした。

この写真は、2023年12月のもので、私が山口代表に、周恩来総理と池田先生の会談から現在に至る流れについてお話しした際の一枚です。

ここで「中日友好の金の橋」に話を戻しましょう。周恩来総理は「井戸の水を飲むときは、井戸を掘った人を忘れるな」と語り、池田先生の貢献を忘れないと述べました。中国は、この恩に報いたいというお話でありました。現在では、なかなかこうした言葉を耳にする機会は少なくなったかもしれません。

では、池田大作先生は一体何を伝えたかったのでしょうか。

私は歴史と哲学を学んできました。中国は「宗教がない国」と言われることがありますが、宗教とは本来、死あるいは永遠の世界を説明するものではないかと考えています。哲学もまた、生と死、現在と未来について深く思索する学問です。

人は誰も、生と死の問題を抱えています。生とは何か、死とは何か——これは個人の時間軸の中で避けられない課題です。池田先生も必ずこの問題に向き合っていたはずで

■ 生死をめぐる生命観

中国では宗教を迷信と見なしがちで、神や幽霊の話に矮小化されます。しかし、近代物理学の研究は、東洋の神秘思想に近い結論を示す部分もあります。私は『近代物理学と東方神秘主義』という本を読んだことがあります。現代物理学の結論は、中国を含む東洋の神秘主義と深く関係していると感じました。例えば、量子レベルの粒子の存在、死後も別の尺度で存在し続ける可能性など、いまだ完全に解明されていない現象は多くあります。これらが今後少しずつ科学とい

う力で実証されていくことができるのかどうかです。

ダークマター、暗黒物質などを含め、宇宙には未解明のものが数多く残されています。死とは何か——古代の思想家である荘子などは死を恐怖としては捉えていません。私たちは死を経験していないため分かりませんが、実際には穏やかなものかもしれません。そのうえで、「では今をどう生きるのか」という問題が浮かび上がります。これは生命を重んじているということですが、人類は一人一人であると同時に、集団としての生命体でもあります。国家もまた一つの生命体であり、生存か滅亡かという問題に直面します。先ほどの宮本雄二元大使、姜尚中東京大学名誉教授の講演にも同様の指摘がありました。

私たちは未来を予測することはできません。第二次世界大戦後、世界は真に平和的な新秩序を築くことができず、今もなお存亡の瀬戸際に立たされています。科学技術が蓄積されるほど、空間の世界、つまり人類社会を消滅させるリスクも高まります。池田先生は『21世紀への展望』やキッシンジャー氏との対話で、核兵器問題など人類の生存に関わる課題を語っています。

■「一（いち）」の哲学——分断を超える全体観

このように考えると、自然に第三の問題へと話が及びます。それは「一（いち）」という概念です。ここでいう「一」とは、統一の「一」であり、時間や空間を人為的に分断してきた現代社会に対し、宇宙本来の自然な姿に戻るための視座を示しています。これは単なる数字としての「一」ではなく、字義的な「無」でもありません。「全て」を意味するものです。さらに言えば、「無」とは「何もない」という否定ではなく、「無限」を内包する概念です。しかし、仮に私がこの「一」を研究対象として捉えようとした瞬間、「一」はすでに「全て」ではなくなります。なぜなら、「一」を把握しようとする思想主体としての「私」が、「一」の外に立ってしまうからです。その意味で、「一」とは、「思考」や「議論」を超えた存在であり、「有」（有限）を超越する「無限」「全体」そのものだと言えるでしょう。

荘子はこれを、「道通為一」と語る一方で、「大道不称」、すなわち「大道は名づけ得ない」と強調しました。慧能のいう「不立文字」も、同様の精神に基づくものだと思います。中国思想においては、「禪の祖型は荘子である」との言い方（范文蘭）があるように、荘子思想と深く通じる天台宗と日蓮宗の系譜に立つ池田先生の心には、「大乘仏教」「大我」「宇宙大生命」といった、「一」の哲学が息づいていたのではないのでしょうか。こうした信仰を理解することで、池田先生の「知行観」の本質も、より明確に見えてきます。具体的に言えば、池田先生はなぜ周恩来総理、トインビー博士、キッシンジャー氏らと会い、深い合意に至ることができたのか。なぜ、そのような世界的な人物との対話を求めたのか。その理由もここにあるのだと思います。

中国、日本、朝鮮半島、ベトナムは文化的に同じ源を持ちます。池田先生は、国家という枠を超え、東アジア全体を一つの歴史的、文明的単位として捉え、その大きな地域観から未来を捉えていたのではないのでしょうか。

また、マルクスについても誤解が多いのですが、本来彼は社会学者であり、彼の考える社会主義は必ずしも国家主義ではありません。中国古代の「大同」の思想にも通ずるところがあります。

トインビー博士は対談の中で、文明には国家の枠を超えた260の文明単位が存在すると述べています。池田先生は、この壮大な文明観の中に交流を見出し、米中関係についても過去の道を繰り返してはならないと語っています。こうした広い視野と知恵、国際観がある人物であったからこそ、池田先生もまた同じ地平に立つ人々との対話を求められたのだと思います。

池田先生は東アジアの人間であり、日本人でもありましたが、その学識と思想はその枠をはるかに超え、東洋と西洋のさまざまなテーマにわたり、使命をもって語り続けてこられたのだと思います。西側の思想家、哲学者、歴史家とも対話を重ね、最終的には共通の基盤を見い出してきました。池田先生は、対立ではなく、包摂と統合という対談者のすべてを包み込むような存在だったと思います。その根底には、やはり仏法の花が精神があつたのではないかと感じています。

■ 国際秩序の揺らぎと現代世界

続いて第四の問題としてお伝えしたいのは、先ほど姜先生がお話された内容とも深く関わりますが、私なりの整理として、国際関係には基本的に二つの体制があるということです。ひとつは国際法を基礎とするウェストファリア体制です。これは「三十年戦争」の終結後に成立した体制であり、これが国際法の基礎となっています。もう一つは、第二次世界大戦後に形成された国際秩序です。ポツダム宣言、カイロ宣言、ヤルタ会議、さらにはサンフランシスコ講和条約も含まれます。ただし、ヤルタ会議およびサンフランシスコ講和条約は密約であり、中国は今日に至るまでこれらを正式には認めていません。

現在、この二つの国際関係の枠組みは、いずれも揺らぎ、再編を迫られています。では、そのような状況の中、私たちは何を考え、どのように行動すべきなのでしょう。姜先生がご指摘されたように、冷戦は形成され、やがて崩壊しました。冷戦体制は一定のバランスを保っていましたが、いつの間にかその均衡が崩れた結果、同盟国同士であっても、従来のような安定した関係を維持することが難しくなっていました。

かつての枢軸国であった日本とドイツでも例外ではありません。現在では両国とも軍事支出のGDP比が2%を超えています。かつてドイツの中央銀行総裁が日本を訪問したこともありましたが、これでいわばパンドラの箱が開き、出てはならないものが出てきてしまった状況とも言えます。戦後、国際環境は大きく変化し、かつての敵はもはや敵ではなく、かつての友が友でなくなる可能性すらあります。

今、その中心にいるのがアメリカです。アメリカこそが今日の国際秩序変動の主役と言えるでしょう。私たちは、この変化に適応していかなければなりません。「不合理だ」「正しくない」「カイロ宣言に戻るべきだ」「ヤルタ会議に戻るべきだ」と主張することは、残念ながら現実的ではありません。今、目の前にあるのが厳然たる「リアリティ」であり、「現実」なのです。

同時に、国際法をめぐる深刻な対立も生じています。中東問題、ウクライナ戦争をはじめ、多

くの事例がありますが、彼らはいったい何を考えているのでしょうか。ウェストファリア体制が今日、問題を抱えるようになったのでしょうか。すなわち、近代以来の国際法体制は、もはや「転覆」されようとしているのではないのでしょうか。「転覆」という言葉は否定的で悪い意味を含みますが、私自身は何よりも国際情勢の安定を強く願っています。

また、中国という国についても、誤解が少なくありません。「中国には独自の国際法がある」と言われることもあります。これは事実ではありません。毛沢東時代、私たちはよく東欧、朝鮮、ベトナムの映画などを見て、「大小の国家が全て平等である」という雰囲気の中で育ち、世界共通の国際法を真剣に遵守していたのです。しかし、あの時代に戻ってはなりません。当時の中国には欧米の意味での資本もありませんでした。今の中国経済の状況は皆さんご存じのとおりです。その意味で、中国に対する誤解は多いと言わざるを得ません。だからこそ、宮本先生や姜先生が中国に対して示しておられる深い理解と的確な評価は、非常に貴重なものだと感じています。お二人は表層ではなく、本質から理解しておられます。

私の表現が適切かどうか分かりませんが、「古い帝国」と「新しい帝国」とではやり方が異なります。私が危惧する新しい帝国とは、他者の資金を横取りしようとする存在です。私の理想は、公平な国際環境の中で平和共存を実現し、互いに奪い合わない世界を築くことです。姜先生も、目先の利益を超え、限りある対立から、無限の包摂的な状態を目指すべきだと述べられました。池田大作先生も、まさにそのような思想を持ち、今も私たちに大きな影響を与え続けています。偉大な人物であり、その考え方ゆえに、今もそばにいるような感覚さえ覚えます。

東洋、特に東アジアは連携すべきです。そうでなければ、欧州がたどった歴史の轍を踏むことになりかねません。欧州は中国に対抗しようとしているのでしょうか。そうではありません。あるいは何とかバランスを取ろうとしているのかもしれませんが、重要なのは生存です。中国が日本や韓国をどう見るか、日本や韓国が中国をどう見るかという点について、絶対にほっておくまま相手を「自由落下」させるわけにはいかないのです。お互いには、単純な地政学的存在ではなく、引越しのできない永遠の隣人でもあり、何千年にわたる倫理関係を共有しているからです。

もともと、「一帯一路」の東の行き先は、韓国と日本でしたが、アメリカ主導のTPPによってその流れは阻まれ、方向転向を余儀なくされました。一方、日本のインフラは、更新の時期を迎えつつあり、そのためには資金と生産能力が必要です。私たちは近隣国であり、中国の近代化40年の歩みの中で、日本から多くの支援をいただきました。その事実を中国の人々は理解しています。

別の見方として、「日本は旧中国を嫌い、認めない。しかし、新中国には期待を寄せている」という認識もあります。中国の人々は、戦争期の日本を憎んでいるかもしれませんが、戦後の新しい日本については十分に理解していないという現実もあります。人と人との交流の中で、このような誤解はどうしても生じます。宮本元大使が午前中に指摘されたように、過去の中日戦争は、歴史上初めて中日の人々が直接ぶつかり合った出来事でした。

留学生の存在も重要です。中国に来た日本人留学生は日本の経験を伝え、中国に行った日本人

留学生もまた中国の実情を伝えています。しかし今、私たちの間には距離が生じています。交流の不足が、その一因かもしれません。こうした状況を前に、私は悲観的な側面も感じています。東アジアは指導者主導の地域です。指導者同士の関係が悪化すれば、国家間の関係も悪化します。だからこそ、一刻も早く指導者・政治家の覚醒を促したいと願っています。現在、中国の人々は日本の政局に非常に注目しています。岸田前首相が「日中同盟」と言い間違えたことがありましたが、もしかするとそれは単なる言い間違いではなかったのかもしれませんが（笑）。

最後に、主催者の皆さまに改めて感謝申し上げます。本日のお二人の基調講演から、多くの示唆と感銘を受けました。ぜひ将来、お二人を中国にお招きし、中国の人々と直接交流していただきたいと思います。そして、今後の中日関係の発展、さらには未来の東アジア共同体の繁栄を心より期待しております。

ご清聴、誠にありがとうございました。